

オーディオ実験室収載

オーディオチェック(4) ーオーディオチェックアナログ (1)ー

1. 始めに

前報(3)までのチェックは CD 音源でしたが、下記のような改善も一段落したことから、今回はアナログ再生でのチェックを実施します。LINN LP-12 の改善経過は次のとおりです。

新規トランスの導入

[My Sonic Stage 1030 の導入シリーズ](#)

新規カートリッジの導入

[My Sonic Signature Gold の導入シリーズ](#)

アナログマジックによる測定と調整

[アナログマジックの導入\(1\)シリーズ](#)

アームの交換

[LINN LP-12 の再構成\(1\)](#)

サブシャーシとアームボードの交換

[LINN LP-12 の再構成\(1\)](#)

ターンテーブルシートの交換

[アナログ関連アクセサリーの試聴\(14\)](#)

フォノケーブルの交換

[LINN LP-12 の再構成\(17\)](#)

アームのオーバーホール

[LINN LP-12 の再構成\(18\)](#)

フェーダーの接続変更

[バランスアナログアキュライザーの導入シリーズ](#)

新規フォノイコライザーの導入

[ZANDEN Model 120 の導入シリーズ](#)

電源の交換

[LINN LP-12 の再構成\(22\)](#)

TruPhase の導入

[TruPhase の導入シリーズ](#)

2. オーディオチェックアナログの実施方法

アナログの再生経路は次のとおりです。

LINN LP-12→ZANDEN Model 120→TruPhase→Langevin 6V6pp

なお、ZANDEN Model 120 の設定は、RIAA、正相、第 4 時定数は High にしておきます。次報以降も同様です。

使用するチェックシステムは次のものです。

JVC 2D101 Checking Audio By Music



A 面

A1 レベル調節とチャンネル・チェック

A2 位相チェックと位相遊び

A3 周波数特性チェック

A4 周波数帯域チェック

A5 クロストーク・チェック

A6 トラッカビリティ・チェック

A7 ワウ・フラッター・チェック

A8 S/N チェック

B 面

B1 チェックの確認 (シャフトのテーマ)

B2 音場へのアプローチ その 1 部屋が変わると音が変わる

B3 音場へのアプローチ その 2 同じ部屋でも条件が変わると音質が変わる

B4 プーミング・チェック

3. オーディオチェックアナログの実施結果

A1 レベル調節とチャンネル・チェックは、L、R とも接続に問題はありません。

A2 位相チェックと位相遊びは、正相は正相らしく、逆相は逆相らしく聴こえます。また、位相遊びでは、位相がぐるぐる回る様子が分かります。なお、位相チェックでは、ZANDEN Model 120 の設定を正相から逆相にしたところ、正相は逆相らしく、逆相は正相らしく聴こえます。

A3 周波数特性チェックは、50Hz から 12.8KHz のスイープ信号ですが、多少の凹凸はあるものの、極端なピーク、ディップはないようです。高域については、やはり 10KHz 付近から聴こえなくなります。

A4 周波数帯域チェックは、低域の帯域チェックでは、50Hz 以下カットおよび 100Hz 以下カットとも低域の伸びがなくなることがわかります。高域の帯域チェックでは、8KHz 以上カット、12KHz 以上カットとも高域の伸びがなくなることがわかります。単純なスイープでは 10KHz 付近から聴こえなくなりますが、恐らくは倍音のビートダウンなどで 12KHz 以上カットの判断ができるのではないかと思います。

A5 クロストーク・チェックは、高域、低域、全帯域とも、マイナス 20dB 程度のクロストークがありそうです。

A6 トラッカビリティ・チェックは、低域はレベル 2 の振幅 200 μ まではなんとかトレースできているようですが、レベル 3 の振幅 300 μ では音がビリつく傾向があります、高域はレベル 3 の +18dB まで問題ないようです。

A7 ワウ・フラッター・チェックは、ワウ・フラッターらしいものは聴こえませんが、わざとワウ・フラッターを加えたものは揺れが感じ取れます。

A8 S/N チェックは、ゴロらしいものは聴きとれません。

B1 チェックの確認（シャフトのテーマ）は、これまでの結果からの調整の再確認の音楽信号ですが、問題なく聴けました。試みに ZANDEN Model 120 の位相を変えたり、イコライザーカーブの設定を変えたりしてみましたが、元のままで良さそうです。

B2 音場へのアプローチその 1 部屋が変わると音が変わる—は、無響室、和室、洋室、残響室などでの録音ですが、かなり音が変わり、もっとも素直な音は和室でした。

B3 音場へのアプローチその 2 同じ部屋でも条件が変わると音質が変わる—は、スピーカの設置場所、高さ、壁からの距離、カーテンやじゅうたんなどの効果を録音していますが、かなり音が変わることがわかります。

B4 プーミング・チェックは、60Hz から 420Hz までのスイープ音が入っていますが、音の凹凸はありますが、ビリつくようなところはありません。

4. まとめ

高域の聴力の限界をつきられたところではありますが、スイープでの音の強弱の他、

特に問題を認めれるようなところはありませんでした。

以上